Ⅰ　下総国を中心とした歴史時代の土器について

阪　田　正　一

1．は　じ　め　に

県下における歴史時代の遺跡は、ここ数十年間調査例を増大する一方で、しかも広範な地域に及ぶ面的なものが多い。検出された遺構・遺物も新たに問題を提示するもの、あるいは問題点解明への糸口を与えてくれたもの等、多く存在する。特に面的な調査の関係より集落遺跡にあっては、数十軒、あるいは百軒以上の竪穴住居群からなる大集落遺跡が検出されている。しかし、集落研究については資料の蓄積があっても集落自体について研究が進んでいるとは言えないであろう。それは集落研究においては、遺物・遺構等の有機的関係を充分に把握し得ない限り、その究明への糸口は見出すことは不可能であろう。遺物は、その時代性を有するものとして古くより編年的研究が進んでいるが、本質的な内容についての検討がなされないままに進んでいるのが現状であろう。そこで本論においては土師器について現状の問題点を先学の業績を考慮しながら論述する所存である。

2．真間式土器の検討と土器の生産について

1）研　究　史

真間式土器の原点が杉原荘介の発掘になる須和田遺跡であることは周知のことであるが、学界に初見する真間式土器の名称は、昭和17年の『古代文化』の誌上において発表された「下総宮ノ台遺跡調査概報ー補遺ー」の表中であろう[註1)]。しかし杉原は真間式土器の存在については須和田遺跡を調査された昭和７年から９年代には考えられていたと思われる。そしてこの真間式土器については「下総須和田遺跡調査報告」として発表されるご心算であったことは『古代文化』の誌上で述べられている通りであろう[註2)]。しかしその報告文もないまま昭和22年に杉原が発表された『原史学序論』において、土師器の四段階の一つとして再び見ることができるが[註3)]、単に年代観を規定されているだけで内容に触れるまでに至らなかった。

その後の動向は土器そのものについては触れられなくなったが土師器を出土する集落遺跡の調査例が多く見られるようになり、次第に土師器に関する資料が蓄積していった。昭和も20年代後半の29年、『西郊文化』の誌上において荻原弘道は「土師式文化前期に対する一考察」と題する論文において[註4)]、荻原が昭和27年に『上代文化』の誌上で報告されている松岸遺跡出土の土器群[註5)]をもって真間式 の不備を補うものとして松岸式土器を仮提唱された。しかし翌昭和30年に荻原の松岸式に対して玉口時雄は落合遺跡の報文中で否定的な見解を発表

された[註6]。それは、1）松岸遺跡が砂丘の遺跡であるため層位が不明で、遺物間の有機的関係が把握し得ない。2）土師器には類似するものがあるとしながらも、須恵器深皿（坏）に見られる切り離しの特徴が表杉ノ入貝塚の長胴鉢（甕）形土器との関連において比較しても時代的に幾分降る。3）皿（盤）形土器は杉原の教示で真間式の標準とされるものに類似している。この3点がその大きな理由となっているようである。しかしここで注意しなければならないのは、層位が不明で一括遺物でないという玉口の指摘はきわめて重要であるが、真間式の標準とされる皿（盤）形土器が松岸遺跡においても出土しているという事実をどのように理解されたであろうか。また一括遺物でない資料を表杉ノ入貝塚の資料と比較されたのはなぜなのであろうか。確かに松岸遺跡出土の甕は口唇部に特徴があり表杉ノ入貝塚出土の甕との関係において考えられたのは当然であろうが、逆に表杉ノ入貝塚で糸切り底の坏が伴出している点から松岸遺跡の場合においても伴出しても良いのではないかということを考えられなかったのであろうか。また皿（盤）形土器について杉原より教示を受けているが甕形土器については触られる点がないが、杉原も当時甕形土器について摘格な資料を持ち合せていなかったのか、あるいは杉原の考えられる甕形土器とは異質なものであったか等定かでないが、いずれにしても分明でない点を残す。玉口は落合遺跡出土の土器は、皿は扁平で坏は比較的浅く底部は僅かに丸味を呈し、外部の稜は顕著でなく、長甕は口辺部が大きく外反し、腹部より口径が大で肩部より腹部への膨みは見られないという皿・甕を特徴とする皿・坏・鉢・台付小形甕・長甕・壺・甑をセットとする落合式を提唱されたのである。

この玉口の落合式提唱直後、杉原は中山淳子と共著で『日本考古学講座』5に「土師器」と題して真間式土器の内容を初めて学界に発表されたのである[註7]。それによると甕形土器は二種あるとされ、一は鬼高式の深甕の後身で長胴を呈し、口縁部は大きく頑丈に作られる甕、いま一は器胎肉が薄く胴が長くないもので、口縁部が一度垂直に立ち、口縁部上端で急に外屈するもの。坏形土器も二種ありとされ、いずれも盤と呼ばれるべきもので、一つは若干丸底で口縁部が真直ぐに上外方に伸び、底部と口縁部との境に稜が残っているものと、同様な丸底であるが稜がなく、滑らかな曲線のものとがあるとされている。さらに脚が鬼高式のものより低くこの期の坏形土器より浅く横に開く形状の高坏形土器があるとされている。これらの外に椀・壺・鉢形土器があると思われるが、壺・椀形土器は非常に減少し須恵器の使用が増してくるとされ、これらの分布範囲が関東地方を中心とするもので西日本では非実用向として存在し、日用品は須恵器が専ら使用されていたと結ばれている。

ここで型式設定者である杉原と中山により初めて真間式土器についての内容が明らかにされたのであるが、今日より見れば誤認している点が多い。図示される甕形土器は現在国分式として認識され、9世紀代頃の相対年代を有する土器であり、しかも川崎市内出土とあるのは骨蔵器として使用された可能性がある土器である。なぜならば図示された土器が竪穴住居跡等の一括遺物であるならば底部に切糸り痕をそのまま残す須恵器の坏が伴出し、当時とし

ても国分式として取り扱れて然るべき土器と考えられるのである。鶴首された真間式土器の内容が公に発表されたにもかかわらず適格な資料批判を欠くために逆に困惑を招く原因になってしまった。

翌、昭和31年に後藤守一は『日本文化史大系』で「須恵器と土師器」を発表されたが[註8]、前年の杉原・中山の説を踏襲するような内容で、坏・盤について述べられている。しかし須和田遺跡出土の例以外は鬼高期にも認められる土器であり、適格な資料になり得ないであろう。また多くの例が金鈴塚古墳出土という特異なものである点も見逃してはならない問題である。

さらに同年に発行された『川越市仙波古代集落跡発掘報告書[註9]』の中に真間式土器についての記述が岩崎卓也の文責になる第4章第1節中に見ることができる。それは、仙波の第二群土器を第三群土器の糸切り痕を有する国分式土器より若干先行するものとし、甕は一群土器から松岸遺跡出土のものを経て発達したと考えられ、真間式土器の後にくるものという考え方をされている。しかし松岸遺跡出土の土器が仙波出土の四群須恵器坏・蓋を伴う点、北関東・東北の影響をも容易に受け得る地であるという二点から、南関東編年の真間式土器に直接対応させることには若干の疑問を持たれているという見解が述べられている。

この仙波での岩崎の考え方はきわめて重要なもので、落合遺跡での見解より一歩前進したと評価できるものである。それは真間式土器から国分式に移行する段階の土器として松岸遺跡出土のものを経て発達したとした第二群土器を考えられたのは、実際には明瞭に把握されないながらも次第に真間式土器の捉え方ができてきたといってよいであろう。

また同年に、萩原は相次いで論文を発表された。一つは『西郊文化』12・13輯に発表された「土師器とその文化」である[註10]。その中で土師器の編年を、和泉・矢倉台・鬼高・松岸・国分とされたのであった。そこで松岸式土器について一瞥すると、須恵器の伴出が多くなることを指摘し、落合遺跡出土の土器より時代が降るようであると述べられている。いま一つの論文は報告文に近いものであるが、『西郊文化』14輯に、昭和30年11月に再度調査を実施された成果に基づき、松岸式と落合式について述べられている[註11]。それによると松岸式も落合式も真間式の不備を補うという点で立場を同じにするが、松岸式には国分式に伴出する須恵器とは異なる前駆的な深皿が伴出することが落合式と異なるとして、落合式より後出のものとして考えられるようになったのである。また松岸遺跡が層位を不明とする点も30年の調査では、ごく限定された混土貝層からの出土とあって、かなり明確にその内容が把握されるに至ったのである。

しかしこの見解もその後の土師器研究に受け入れられることが少ないのであるが、昭和33年中山が『考古学手帖』[註12]において発表された「土師器小考」の中でその一端が認められる記載があることを認めなければならないであろう。中山によれば、第Ⅲ期として鬼高・矢倉台・落合・真間の土器を一括され、その終末形態として真間式を考えられている。具体的で

ないにしろ真間式は落合式より新しい段階の土器と考えられているような記載の方法である。これはきわめて重要な問題を有している。それは、かつて真間式の不備を補うものとして提唱された松岸式・落合式が萩原によって松岸式を落合式の後出と考えた点、あるいは先述の岩崎の見解等と一致する内容であり、少なくとも従来考えられていた真間式は古い段階と新しい段階が認められたと考えてよいであろう。真間式の古い段階として落合式の内容を有する土器群、新しい段階として真間式（真間式設定の根拠になった土器群）・松岸式の内容を有する土器群が想定でき、真間式と松岸式とは同一の内容を具有する土器群である可能性が充分考えられるのである。

その後30年代にはこれという研究がないままに40年代を迎えた。昭和40年に『考古学雑誌』の誌上において倉田芳郎は「南関東地方における住居址出土の土師器」と題する論文を発表された[註13]。それは須恵器との有機的関係によって土師器の編年観が述べられているもので、形態的な問題等については触れられる点がない。真間式土器については後期Ⅰとして落合遺跡の例をあげられ、糸切り底はないとされている。

また昭和42年に土師器の研究を積極的に進められてきた岩崎は、『大塚考古』の誌上において「真間式土器小考」を発表されたのである[註14]。それは真間式土器の研究史、真間式土器の再検討、真間式土器の年代、真間式土器のひろがり等４項目で構成され、細密に論述されている。これらより導びき出された岩崎の結論は、坏形土器は盤状の浅いものとなり、須恵器の模作から離れてくる。技術の向上に裏付けられて、極度に薄手の長甕形土器を伴う。高台付須恵器をしばしば伴出するが糸切り底の土器を伴うことはほとんどないというもので、落合遺跡・栗原遺跡出土の土器群を真間式と考えられているようで、実年代を８世紀を中心とする時期を考えられている。

ここで岩崎は重要な問題点を見逃している。それは仙波遺跡での研究成果では真間式と松岸式土器についての疑問があるとされた点が論考では、「萩原弘道氏の松岸式土器については前記玉口氏の批判があり、いまこれにつけ加えるべきを持たない。」とされたのは一体どうしたことであろうか。落合遺跡では竪穴住居出土の一括遺物であるという資料的な強味がある点は事実であるが松岸式を否定されたことは仙波遺跡での第二群土器の性格ずけ、真間式から国分式への移行を知る手懸を放棄したことであり、真間式土器の歴史性を無視したことになるのではないであろうか。ただ甕形土器の特異性を注意され、松岸遺跡の土器群の捉え方について次のような記述がある。「口唇部が僅かに立ち上がりをみせる甕は、その後福島県下でも糸切り底を有する坏と伴出しており、…中略…この松岸遺跡ではむしろ盤状の坏と糸切り底の須恵坏が伴出した可能性もあるということのみ注意しておくにとどめたい。」。きわめて重要な問題点をこのような形にとどめられたのには鬼高式土器を考慮に入れられた所以であろう。しかしこの岩崎の論は広く支持された点を注意したい。

その後昭和43年に土師器の研究に造詣の深い岡田淳子は服部敬史と共に永年調査された中

田遺跡の成果に基づき『資料篇』Ⅲにおいて第3章として「土師器の編年に関する試論」を収録されている[註15]。それによると坏形土器の観察から真間式をⅠ類・Ⅱ類土器に分析されている。Ⅰ類の甕形土器は口縁部が大きく外反し、肩部が若干張り、直線的に底部にいたる長胴の甕と、球形の胴部を呈する甕があるとされている。坏形土器は平底に近い底部で口縁部上端はほとんど外方に小さく開くものと、扁平で口縁部が内曲するものなどがあるとされ、その他に鉢形土器、まれに甑形土器がみられるとされている。Ⅱ類の甕形土器は、口縁部が頸部のくびれが単に外方に開き肩部付近に張りがあり、直線的な胴部を呈する長胴の甕と、胴部が大きく張り、口径が広いもの、あるいは小形で球形の胴部と頸部の短い壺形土器に近い甕などであるとされている。坏形土器はⅠ類で見られた平底化している土器の上に成立したものとされる平底の土器で器形の整った盤状の土器とされ、紅彩されるのが特徴とされている。その他に丸底の椀形土器、平底あるいは椀形土器を大きくしたような鉢形土器等があるとされている。

この中田遺跡での研究で真間式がⅠ類・Ⅱ類という表現であるにせよ二分されたことは高く評価できるもので、特にⅡ類とした坏に定形化し赤彩された土器は特徴的な存在として注目される。

その後真間式土器の研究はなく当該期の集落遺跡の調査が盛んに実施された。その中にあって昭和46年に出版された『市川市史』第一巻[註16]、あるいは昭和49年に出版された『日本考古学の現状と課題』所収の「土師器とその集落[註17]」は土師器編年の総論的なものである。また昭和49年には『土師式土器集成』本編4がある[註18]。これは杉原自身による須和田遺跡での成果が盛り込められたもので幻に近い真間式の実態が初めて開陳されたものであるといっても過言ではないであろう。

以上研究史を瞥見してきたが、その研究も真間式土器の型式設定時において明確にその内容を示されなかった点に起因するものとして取り扱われていたものが大半のようであった。そして今日『市川市史』、あるいは『土師式土器集成』で真間式土器の内容を窺知でき、今までの真間式土器研究に終止符がうたれた観がある。しかし全般にわたりその内容が正確に理解されているとはいえないであろう[註19]。そこで次の項では『市川市史』、『土師式土器集成』を母体にして真間式土器について検討を加えてゆきたいと考える。

2）検討と土器の生産について

嘗て『千葉東南部ニュータウン』－3－報文中[註20]、小結において、土師器と並行して真間期の段階において叩き目を有する土器が出現し、国分期に及んでいることを指摘したことがある。これは昭和50年の八千代市村上遺跡群における『須恵質土器[註21]』、あるいは昭和52年の山田水呑遺跡における『土師質須恵[註22]』と同様のものとして捉えて差支えないものである。即ち歴史時代の土器についてはこの土器群を明確に把握しない限り土器研究は進展しないで

あろう。そこで真間式土器を『土師式土器集成』より瞥見したい。

『土師式土器集成』によると、『市川市史』でつかみにくいとされた土器群も「その後、須和田遺跡出土の資料も順次に増加して、現在ではその型式的な特徴をより詳細に、そしてその組成も明確に知ることができるようになった[註23]。」とされ、須和田遺跡の真間式土器を、甕・長胴形甕・甑・広口鉢・浅鉢・坏A・B・盤A・B・高坏形土器により組成される土器群を開陳された。以下紹介する（第1図）。

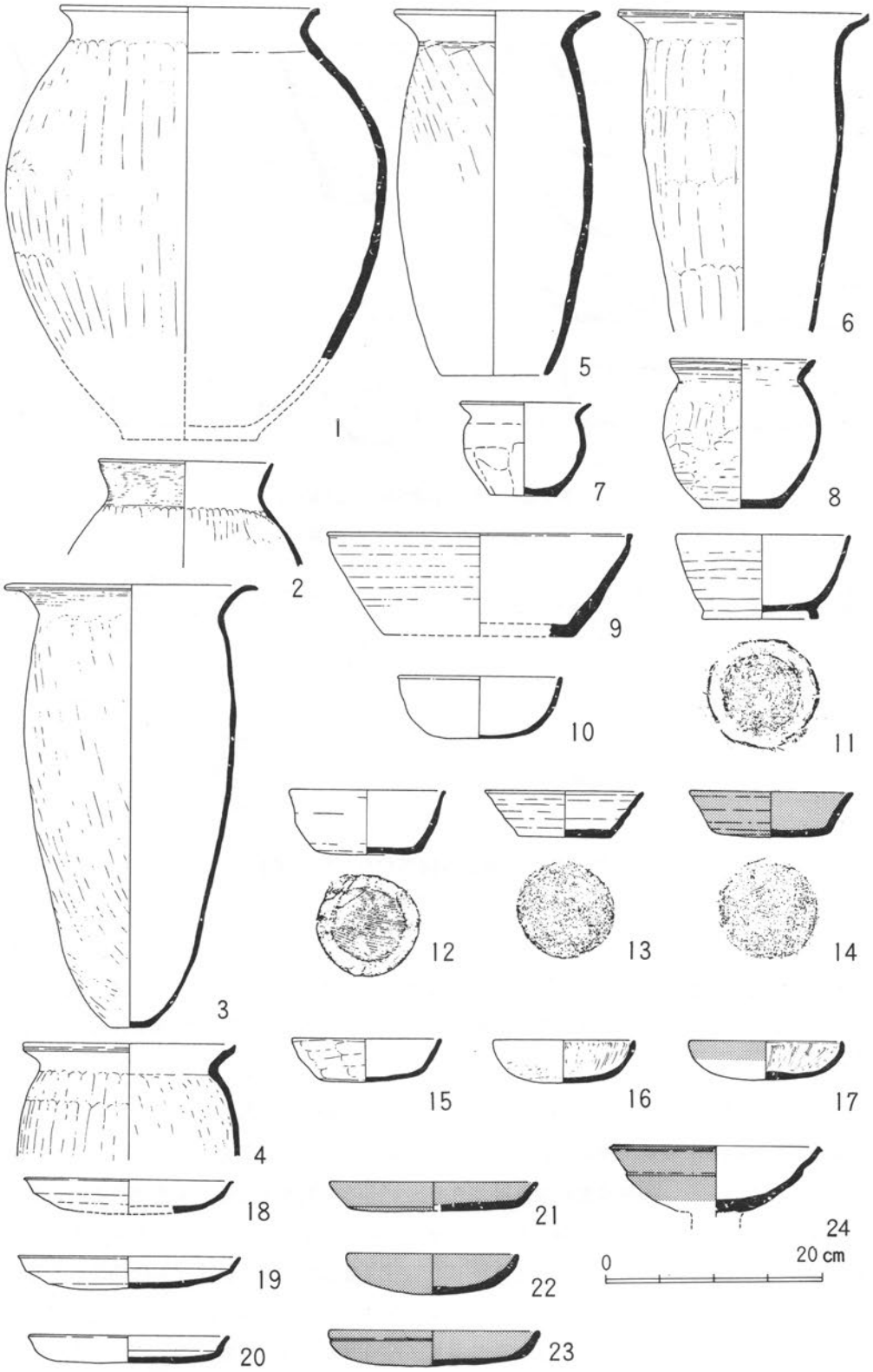
甕形土器は、大形で胴部最大径が胴中位やや上位にあり、頸部は比較的にしまり、口縁部は小さく反転する形状のものとされる。長胴形甕形土器は甑形土器と組合せられる器形と思われるもので、胴部最大径が胴中位やや上位にあるが口径より大きくなく、口縁部は小さく外反するものとされる。甑形土器は、長胴形甕形土器に類似した器形を呈し、胴部は筒状で、甑穴は底部が欠失した如き大きな孔であるとされる。広口鉢形土器は、胴部最大径は胴中位より上位にあり、器高に等しい口径を呈し、口縁部は外反し底部は大きく平底を呈するとされる。浅鉢形土器は、大形のもので平底、丸底、それに高台付のものがあり、糸切り痕を残すとされる。坏形土器Aは、ロクロを使用したもので大きな平底を特色とし、糸切り痕があり、一例だが丹彩されるものなどがあるとされる。坏形土器Bは、手捏ねのものが多く、丸底が特色とし、鬼高Ⅱ式の伝統が認められるとされる。盤形土器Aは、ロクロを使用したもので、外側に稜を有することが特徴で糸切り痕があり、丹彩の例はほとんどないとされる。盤形土器Bは、手捏ねのものが多いと思われるもので、平底に近い底部のものと丸底のものとがあり、内外両面に丹彩することが特徴であるとされる。高坏形土器は、高さが不明であるが、坏部外側に稜を有し柱状の脚裾の末端は面を呈し、凹線がみられるとされる。

以上がその内容であるが、叩き目を有する土器については触れられるところがない。そこでこれらがどのような組合せを有しているかを一瞥しなければならない。幸に『市川市史』に権現原遺跡出土の一括資料が真間式土器として上げられている（第2図）。

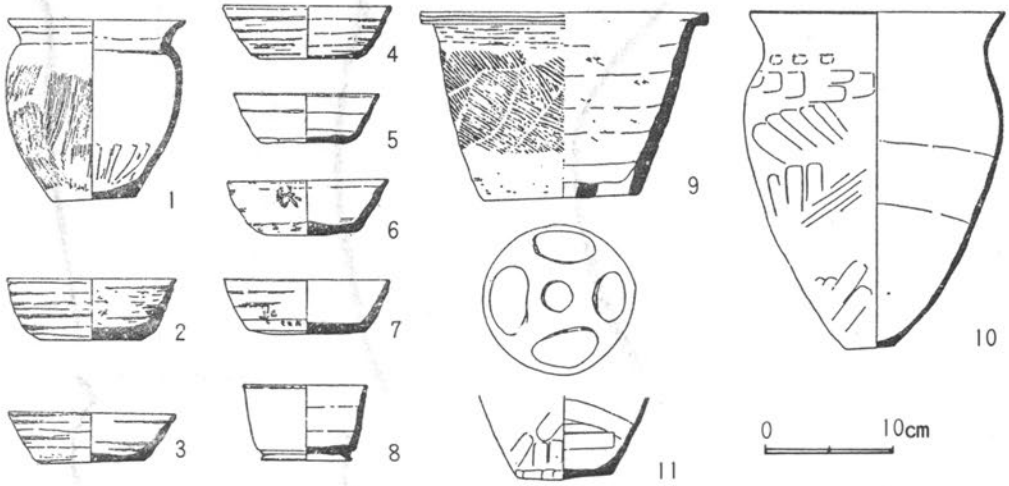
そこで『考古学集刊[註24]』の記述を参考に一瞥すると次のとおりである。甕は若干外反する口縁部を呈し、肩部が少し張り、胴下部にゆるく傾き、底部は小さく不安定なものと、口縁部が外反し口唇部がわずか膨らみ肩部は張り、安定した平底のものとがある。坏は体部が若干内屈ぎみに開くもので中には糸切り底のものが見られる。また体部がわりに小さく開く高台付坏、それに叩き目を有する甑がある。

『市川市史』によれば真間期の最終末に相当するとの年代観が出されており、一応の上限になる叩き目を有する土器の一括資料として捉えて良いと思われるが、これより古い時期の例として大森第2遺跡68号より出土した叩き目を有する土器は[註25]、和泉期の坩等と伴出している例であるが、遺構の状況等を考慮すれば和泉期に共伴するとは考えにくい。その他の例としては大森第2遺跡17号の資料を上げられる[註26]（第3図）。

甕は口縁部が水平近くに外反するもので長胴の形状を呈し、坏は平底に近い丸底のもので

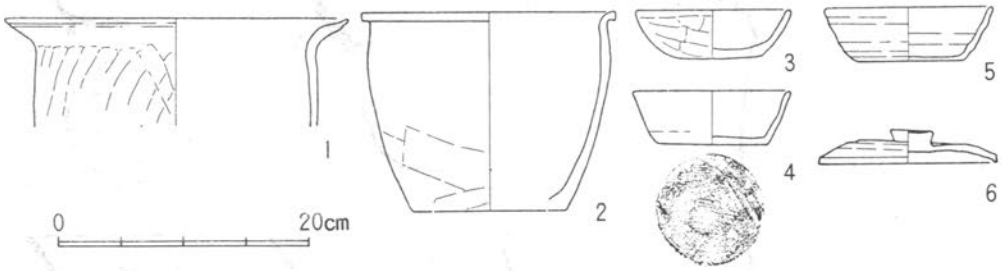


第１図　須和田遺跡出土の真間式土器　（『土師式・土器集成』本編４より加筆転載）



第2図　権現原遺跡出土遺物

（『市川市史』1巻より転載）

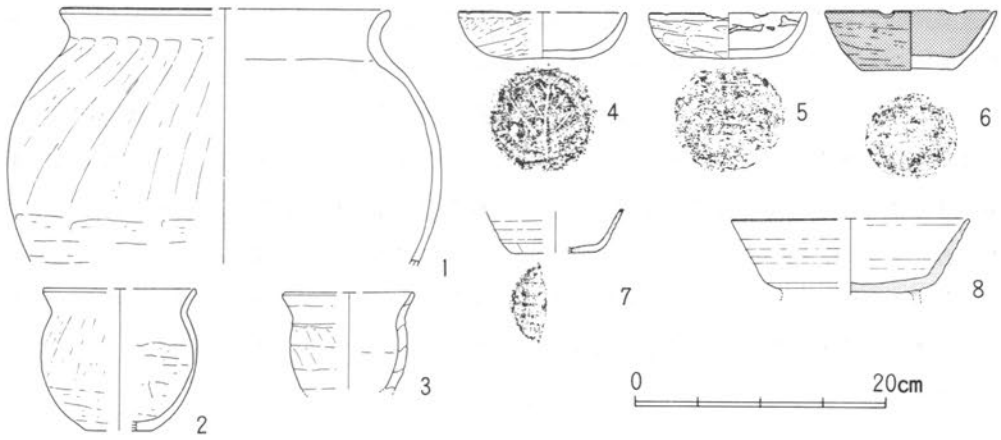


第3図　大森第2遺跡第17号址出土遺物

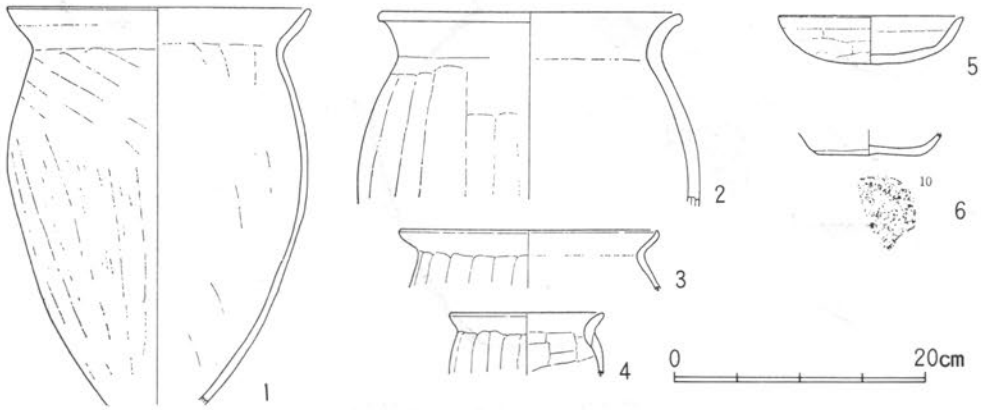
（『京葉』より転載）

体部はヘラ削り調整されるもの等で、それに須恵器で一部土師質になっている甕（甑）、それに坏、蓋が出土している。甕（甑）は胴部上位に叩き目が認められ、胴部下部はヘラ削り調整になっている。

坏形土器3は、『土師式土器集成』によれば、坏形土器B類に酷似し、甕形土器は、長胴甕形土器に酷似しており、鬼高Ⅱ式の流れを有するとされる土器等と同一、ないしそれに近い形状のものであり、権現原遺跡の資料より前出する時期を考えても差支えないように考えられる。許されるならば、真間期における中葉の時期を具備していると考えたい。また村上遺跡 081号[註27]（第4図）、あるいは有吉遺跡 050号[註28]（第5図）等の資料は酸化焔焼成の叩き目を有する土器との共伴関係が認められず、真間期においては前葉の時期として捉えてよいと思われる。叩き目を有する土器は真間期中葉から後半の時期に初現すると考えて良いであろう。



第4図　村上遺跡 081遺構出土遺物
（『八千代市村上遺跡群』より転載）



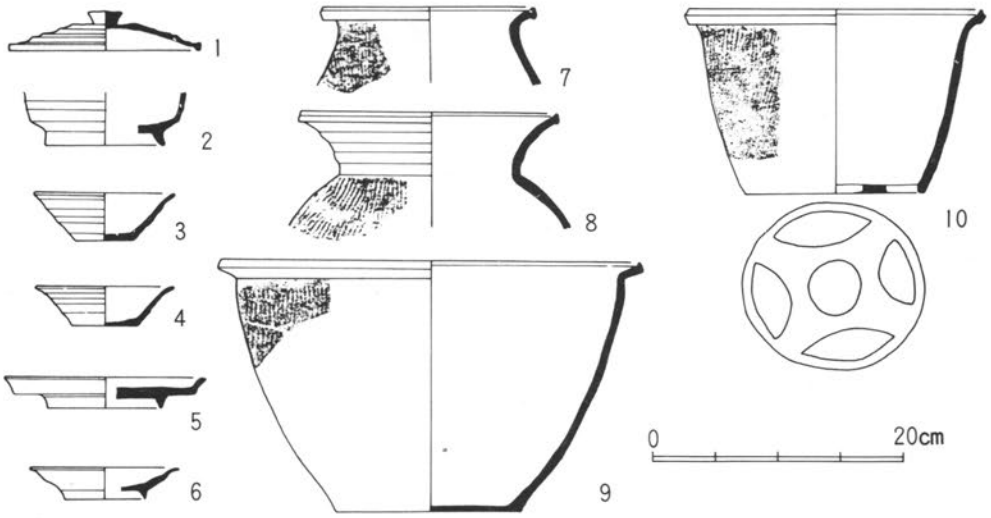
第5図　有吉遺跡 050号址出土遺物
（『千葉東南部ニュータウン』３より転載）

叩きじめ技法は本来、還元焔焼成になる須恵器の甕等に認められるもので、その生産にかかわる手法であるが[注29]、権現原遺跡の例をはじめ、叩き目を有する土器が酸化焔焼成になっているものが支配的傾向にある。また叩き目を有する土器に伴出する還元焔焼成の土器、即ち須恵器は少ない状況が一般的傾向として各遺跡の資料を通じて認められる。更に還元焔焼成になる須恵器は、大森第１遺跡17号出土遺物を代表例として酸化焔焼成の土器との伴出関係が認められない点も各遺跡の資料を通し窺知できる。かかる現像は、その土器の生産された時期の問題とともに窯業技術に関係する問題と考えられる。

県内における窯業遺跡の調査例は少なく、概して瓦窯跡の例で、須恵器生産関係は、永田、

不入窯跡群[註30]の例のみである。永田、不入窯跡群は上総国に位置しており、下総国内では現在皆無の状況であり、その実態については分明を欠く点が多い。

そこで下総国近接の例として常陸国新治郡小野窯跡の資料があげられる[註31]（第６図）。窯跡群中２基が調査されているが、トンネル式登り窯の構造を呈するもので、出土遺物は、蓋・坏・甕・甑などである。ここで注意したいのは甑の形状が権現原遺跡の例と若干の相異は認められるもののきわめて類似したものであるという点である。報告文はごく簡単な記載であるため詳細は明らかでないが、須恵器であるとされていることからすれば還元焔焼成されたものと考えて良く、叩きじめ技法が本来須恵器生産にかかる手法であることが更に明確になったであろう[註32]。



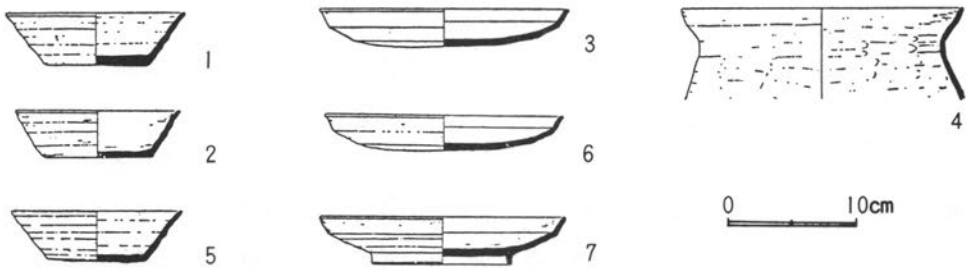
第６図　小野窯跡出土遺物

（『日本考古学年報』６より加筆転載）

かかる観点から権現原遺跡出土の叩き目を有する土器をはじめとする一連の土器群についてどのように捉えるか問題になってくる。

前述のとおり、真間期中葉に須恵器が初現し、後半に至って酸化焔焼成になる叩き目を有する土器が伴出する傾向は、在地における還元焔窯業と有機的関係を有すると考えられる。それは８世紀中葉、741 年、聖武天皇により発せられた国分寺造営の詔以降、下総国においても造瓦をはじめ須恵器生産が大規模に開始された事と関連して、急激に集落内部にも須恵器が持ち込まれた所以であろう。しかし量産化に伴う質的な低下が叩き目を有する土器で酸化焔焼成のものを生み出したのではないかと考える[註33]。そして生産にあたっては登り窯の構造を有する窯で大量に焼成されたことが予測できる。よって本来須恵器として認定することが必要と思われる。

以上のように見てくると、甕・甑など叩き目を有する土器のみでなく、坏その他の土器もかかる状況において生産された可能性が当然考えられる。須和田遺跡16号住居址出土遺物を『市川市史』により復元すれば、須恵器の坏、盤に土師器の坏・盤が伴出している(第７図)。時期的には真間期中葉と考えられるが、土師器の坏・盤は極めて須恵器とその形状が酷似することを見い出すことができる。この盤形土器は杉原をして真間式土器設定時のメルクマールになったものであるが、真間式の盤形土器も須恵器として生産された可能性が大である。またこの形状を呈する盤形土器の類例を須和田遺跡以外に求めると、管見に触る範囲では、石神第Ⅰ地点第５号住居址出土遺物のみである[註34]。このような現象は須和田遺跡が国分寺等に近接する位置にある特殊性が原因するもので、国分寺等に供給するため生産されたものが須和田遺跡内に持ち込まれたと考えられる。更に『土師式土器集成』によれば盤形土器Ａ類は丹彩されることがないとされる点も須恵器として生産されたからではないであろうか[註35]。



第７図　須和田遺跡第16号住居址出土遺物
（『市川市史』１巻より転載、１～４土師器、５～７須恵器）

以上真間式土器に検討を加えてきたが要点をまとめると。

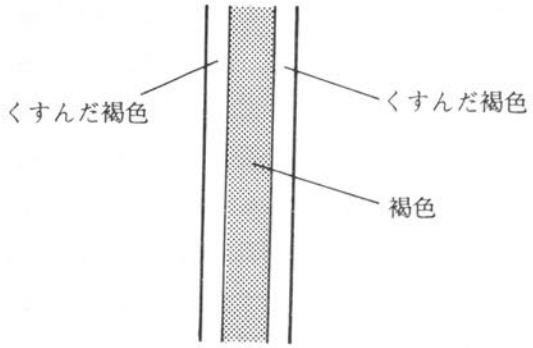
１．真間式土器の特徴とされる盤形土器（Ａ類）は須恵器として生産された可能性がある。

２．坏形土器（Ａ類）も須恵器として生産された可能性がある。

３．叩き目を有する甕・甑が伴出するが、本来須恵器として生産されたものである。

最後にあたりこの一連の土器に対し、今日生産遺跡の実態が明確でないが、褐色須恵器という名称をもって土師器及び還元焔焼成の須恵器と区分したい。そして褐色須恵器の判別は土器断面の状況が中央部が褐色、あるいはそれに近い色調で、表裏は褐色、あるいはそれに近い色調がくすんだ色調（灰色、青灰色を帯びる）が観察されたならばそれが本来一般的に須恵器として生産された褐色須恵器である（第８図）。ただし坏類等は器壁が薄いため充分観察できない場合があることを付け加えておく。

以上酸化焔焼成された褐色須恵器について叩き目の打圧痕を有する土器を中心に述べてきた。そして坏類についても同様の可能性があることを指摘したが、それ以外の長胴の甕について若干述べてみたい。



第8図　土器断面模式図

『土師式土器集成』によれば甕形土器、長胴形甕形土器の2種あり、後者は胴部最大径が胴中位やや上位に位置し、口径より大きくなることがないとされる土器で、口唇部に特徴のある土器である。この口唇部に特徴のある土器は、小室遺跡[註36]、江原台第1遺跡[註37]において既に鬼高期に認められる土器であるが、この時期には普遍的な広がりを有する土器でない。真間期においては中葉以降、しかも後半頃にこの土器の例が増加する傾向が各遺跡において一般的である。この傾向は褐色須恵器の初現とほぼ同時である現象を呈している。今この現象については積極的な判断を下す方法はないが、有吉遺跡 035、048、122号址出土遺物[註38]中、肩部よりヘラ削り調整される甕に口縁部とヘラ削りが施される肩部との間に叩き目を有し酸化焔焼成される土器が存在していることに注意したい[註39]。

この口唇部に特徴が認められる長胴の甕は下総国の他に下野国において散見できるものであるが[註40]、隣接武蔵国においては管見に触れる資料はない[註41]。近時、下総型、武蔵型、相模型として取り扱われているのはかかる状況の相異によるものであろう[註42]。この相異は、大きくは国単位、小さくは里単位の生産体制があったことを想定できるものである。口唇部に特徴のある長胴の甕が武蔵国内で見られない点については既に述べたが、武蔵国内において普遍性を有する甕で、器壁がヘラ削りにより著しく薄く調整され、口縁部が『く』字状、あるいは逆『コ』の字状の形状を呈す土器が下総国等で散見されるのをどのように理解すべきであろうか。この現象を生産問題とは別に古海道に関係を求めたいと思う。

『続日本紀』[註43]によれば宝亀二年十月己卯。

太政官奏。武蔵国雖属山道。兼承海道。公使繁多。祗供難堪。其東山驛路。従上野国新田驛。達下野国足利驛。此便道也。而柱従上野国邑楽郡。經五ケ驛。到武蔵国。事畢去日。又取同道。向下野国。今東海道者。従相模国夷参驛。達下総国。其間四驛。往還便近。而去此就彼損害極多。臣等商量。改東山道。属東海道。公私得所。人馬有息。奏可。

とあり宝亀２年まで武蔵国への本道が上野国邑楽郡から五ケ駅を経ていたのが、以降相模国夷参駅を経ることになった間の様子を記載したものである。即ち東山道より東海道諸国内に編入換になった記事である。ここで問題になるのは五ケ駅である。五ケ駅については諸説あるが[註(44)]、五ケ所の駅を指すと考える説をとりたい[註(45)]。そこで五ケ所の駅とはどの駅等を指すかということになる。

『続日本紀』によれば神護景雲二年三月乙巳朔。

―前文略― 又下総国井上。浮嶋。河曲三驛。武蔵国乗潴。豊嶋二驛。承山海両路。使命繁多。乞准中路。置馬十疋。奉勅依奏。―後文略―

とある下総国井上、浮島、河曲、武蔵国豊島、乗潴の各駅を考えたい。今これらの駅家の比定地を求めると次のようになる[註(46)]。

井上駅は松戸市を中心とする地域、浮島駅は東京都葛飾区を中心とする地域、河曲駅は茨城県古河市を中心とする地域、豊島駅は東京都豊島区を中心とする地域、乗潴駅は東京都杉並区を中心とする地域が考えられる。下総国内の河曲、井上駅はいずれも利根川及び江戸川沿に位置することが窺知できよう[註(47)]。

宝亀二年までは武蔵国は東山道に属していたとはいえ、土器生産に関しては相模国系の影響を受けていたことは、国府等の位置を考えても認められるところである。また下総国は東海道に属していたとはいえ、東山道本道に位置する駅家を有し、しかも東山道本道の駅路中に国府等が位置することは東山道系の影響を受けていたことも認められるところであろう。このような状況下において宝亀２年以降武蔵国が東海道に編入換えになり、東海道が相模国夷参駅より中間４駅を経由して下総国に達するルートは武蔵国を通過した訳であり、武蔵国系の影響が下総国において散見できる結果となって顕現するのではないであろうか。最後に下総国における褐色須恵器の初現時期、また口唇部が突出する特徴を有する甕形土器が増加する時期等が、宝亀２年の記事にうまく符合している点を指摘して終りとしたい。

註

(1) 杉原荘介 「上総宮ノ台遺跡調査概報」 ―補遺― 『古代文化』13巻７号 昭和17年

(2) 註(1)に同じ

(3) 杉原荘介 『原史学序論』 昭和21年

(4) 荻原弘道 「土師式文化前期に対する一考察―矢倉台式土器の提唱―」 『西郊文化』８輯 昭和29年

(5) 荻原弘道 「銚子市松岸町原史時代遺跡に就いて」 『上代文化』23号 昭和27年

(6) 玉口時雄 「落合遺跡出土の土師器に就いて」 『落合』 昭和30年

(7) 杉原荘介・中山淳子 「土師器」 『日本考古学講座』５ 昭和30年

(8) 後藤守一　「須恵器と土師器」　『図説日本文化史大系』1巻　昭和31年

(9) 岩崎卓也他　『川越市仙波古代集落跡発掘調査報告書』　川越市教育委員会　昭和31年

(10) 荻原弘道　「土師器とその文化」　『西郊文化』12・13輯　昭和31年

(11) 荻原弘道・古加　壽　「銚子市松岸遺跡の土師器」　『西郊文化』14輯　昭和31年

(12) 中山淳子　「土師器小考」　『考古学手帖』4　昭和33年

(13) 倉田芳郎　「南関東地方における住居址出土の土師器」　『考古学雑誌』50巻3号　昭和40年

(14) 岩崎卓也　「真間式土器小考」　『大塚考古』8　昭和42年

(15) 岡田淳子・服部敬史　「土師器の編年に関する試論」　『八王子市中田遺跡』資料篇Ⅲ　昭和43年

(16) 杉原荘介他　『市川市史』1巻　昭和46年

(17) 玉口時雄　「土師器とその集落」　『日本考古学の現状と課題』　昭和49年

(18) 杉原荘介他　『土師式土器集成』本編4　昭和49年

(19) 研究史を瞥見する間に真間式土器が設定された時点の内容は松岸遺跡出土の土器と同様か、またはそれに近いものであったのではないかという事が想起された。

(20) 栗本佳弘・種田斉吾　『千葉東南部ニュータウン』3　千葉県都市公社　昭和50年

(21) 天野　努・谷　　旬　『八千代市村上遺跡群』　千葉県都市公社　昭和50年

(22) 松村恵司他　『山田水呑遺跡』　山田遺跡調査会　昭和52年

(23) 註(18)中　杉原荘介「晩期Ⅰの土師器」

(24) 原田道雄　「千葉県権現原遺跡出土の土師器」　『考古学集刊』4巻3号　昭和44年

(25) 栗本佳弘　「大森第2遺跡」　『京葉』所収　昭和48年

(26) 註(25)中「大森第1遺跡」

(27) 註(21)に同じ

(28) 註(20)に同じ

(29) 横山浩一　「手工業生産の発展ー土師器と須恵器ー」　『世界考古学大系』3　昭和34年

(30) 国士館大学考古学研究室　『千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書』　千葉県教育委員会　昭和51年

(31) 高井悌三郎　「茨城県新治郡小野窯跡」　『日本考古学年報』6　ー昭和28年度ー
仮りに酸化焔焼成であるが叩き目を有すということから須恵器とされたことも考えられるが、その場合の焼成が登り窯の構造を有する窯で生産されたことになるであろう。土師器はかかる構造を呈していない窯での生産が可能である。

(32) ただし畿内弥生時代における叩き目技法とは別に考えたい。佐原　真他　『紫雲出』詫間町文化財保護委員会　昭和39年

(33) 田辺昭三　『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園　昭和41年　及び註(21)山田友治「山田水呑遺跡出土の須恵器・灰釉陶器」によれば海成粘土は耐火性の悪い点を指摘されておりこれも一つの要因として考える必要がある。

(34) 伊礼正雄・熊野正也　『臼井南』　佐倉市教育委員会　昭和50年

(35) 小笠原好彦　「丹塗土師器と黒色土器」(2)　『考古学研究』18巻３号　昭和46年

(36) 椙山林継・佐藤克己他　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』１－小室－　千葉県都市公社　昭和49年

(37) 海野道義・田村言行他　『江原台第１遺跡発掘調査報告』　佐倉市教育委員会　昭和52年

(38) 註(20)に同じ

(39) 外面に叩き目が見られる土器の外、しばしば口唇部の突出する長胴の甕形土器内面に叩きしめ調整を施す際の当木痕が認められるのも注意が必要であろう。

(40) a 大金宣亮・川原由典他　『井頭』　栃木県教育委員会　昭和49年
b 川原由典・橋本澄朗　『薬師寺南遺跡』　栃木県教育委員会　昭和53年

(41) 後述するが江戸川を界に下総国と武蔵国では土器の様相が異なっている。

(42) 福田健司　「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」　『考古学雑誌』64巻３号　昭和53年

(43) 『国史大系』　第26巻　吉川弘文館

(44) a 坂本太郎　「乗瀦駅の所在について」　『西郊文化』　７輯　昭和29年
b 田名網　宏　『古代の交通』　吉川弘文館　昭和44年

(45) 註(44) a の文献による。

(46) 郷岡良弼　『日本地理志料』　上　臨川書店　昭和41年　によるところが大であり、参考として吉田東伍　『大日本地名辞書』　６巻　冨山房　昭和51年を用いた。

(47) この結果、下総国が東山道に属していたかの印象があるが、神護景雲二年の記事には山海両路を承けて使命繁多なりとあることを示していると理解したい。